

9.16 [金]

第596回 名曲シリーズ
サントリーホール／19時開演
Popular Series, No. 596
Friday, 16th September, 19:00 / Suntory Hall

指揮／ヘスス・ロペス＝コボス Conductor JESÚS LÓPEZ-COBOS P.6

ピアノ／ホアキン・アチュカロ Piano JOAQUÍN ACHÚCARRO P.8

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

シャブリエ 狂詩曲〈スペイン〉 [約8分] P.9
CHABRIER / Rapsodie “España”

ファリャ 交響的印象〈スペインの庭の夜〉 [約23分] P.10
FALLA / Nights in the Gardens of Spain

I. ヘネラリーフェにて
II. はるかな踊り - III. コルドバの山の庭にて

[休憩 Intermission]

アルベニス (アルボス編) 〈イベリア〉から
ALBÉNIZ (arr. ARBOS) / Excerpts from “Iberia”
“喚起” “港” “セビリアの聖体祭”
“トリアーナ” “エル・アルバイシン” [約28分] P.11

トゥリーナ 交響詩〈幻想舞曲集〉 作品22 [約17分] P.12
TURINA / Danzas fantásticas, op. 22
I. 熱狂
II. 夢想
III. 饗宴

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文部科学省文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
〈サントリーホール30周年記念参加公演〉



9.20 [火]

第11回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール／19時30分開演 (19時から解説)
Yomikyo Ensemble Series, No. 11
Tuesday, 20th September, 19:30 (Pre-concert talks from 19:00) / Yomiuri Otemachi Hall

※出演者と曲目のみ掲載しています。曲目解説は当日別紙を配布予定です。

《長原幸太ら読響メンバーの室内楽》

ヴァイオリン／長原幸太 (コンサートマスター)、瀧村依里 (首席)
Violin KOTA NAGAHARA (Concertmaster), ERI TAKIMURA (Principal)

ヴィオラ／鈴木康浩 (ソロ・ヴィオラ)、柳瀬省太 (ソロ・ヴィオラ)
Viola YASUHIRO SUZUKI (Solo Viola), SHOTA YANASE (Solo Viola)

チェロ／高木慶太 (首席代行) Cello KEITA TAKAGI (Acting Principal)

ナビゲーター／鈴木美潮 (読売新聞東京本社 社長直属教育ネットワーク事務局専門委員)
Navigator MISHIO SUZUKI

モーツァルト デイヴェルティメント 変ホ長調 K. 563 [約45分]
MOZART / Divertimento in E flat major, K. 563

I. Allegro
II. Adagio
III. Menuetto : Allegretto
IV. Andante
V. Menuetto : Allegretto
VI. Allegro

ヴァイオリン／長原幸太、ヴィオラ／鈴木康浩、チェロ／高木慶太

[休憩 Intermission]

ベートーヴェン 交響曲 第7番 イ長調 作品92 (弦楽五重奏版) [約36分]
BEETHOVEN / Symphony No. 7 in A major, op. 92 (string quintet version)

I. Poco sostenuto - Vivace
II. Allegretto
III. Presto
IV. Allegro con brio

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

9.24 [土]	第191回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Saturday Matinée Series, No. 191 Saturday, 24th September, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
9.25 [日]	第191回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Sunday Matinée Series, No. 191 Sunday, 25th September, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー（名誉指揮者）

Honorary Conductor GENNADY ROZHDESTVENSKY P.7

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

《チャイコフスキー／三大バレエ名曲選》

チャイコフスキー バレエ音楽〈白鳥の湖〉から
TCHAIKOVSKY / Excerpts from “The Swan Lake”“序奏” “ワルツ” “4羽の白鳥の踊り” “ハンガリーの踊り”
“スペインの踊り” “フィナーレ” [約23分] P.13チャイコフスキー バレエ音楽〈眠りの森の美女〉から
TCHAIKOVSKY / Excerpts from “The Sleeping Beauty”

“ワルツ” “パノラマ” “アダージョ” [約16分] P.14

[休憩 Intermission]

チャイコフスキー バレエ音楽〈くるみ割り人形〉から 第2幕 [約41分] P.15
TCHAIKOVSKY / Act II from “The Nutcracker”I. 情景、魔法の城 - II. 情景、クララと王子・くるみ割り人形の登場 -
III. デイベルティスマン “チョコレート” “コーヒー” “お茶” “トレバック”
“葦笛の踊り” “道化者の踊り” - IV. 花のワルツ -
V. パ・ド・ドゥ “序奏” “変奏Ⅰ” “変奏Ⅱ” “コーダ” -
VI. 終幕のワルツとアポテオーズ

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[助成] 文部科学省文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）

[事業提携] 東京芸術劇場

9.26 [月]	第562回 定期演奏会 サントリーホール／19時開演 Subscription Concert, No. 562 Monday, 26th September, 19:00 / Suntory Hall
----------	--

指揮／ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー（名誉指揮者）

Honorary Conductor GENNADY ROZHDESTVENSKY P.7

ピアノ／ヴィクトリア・ポストニコワ Piano VIKTORIA POSTNIKOVA P.8

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

ショスタコーヴィチ バレエ組曲〈黄金時代〉 作品22a [約16分] P.16

SHOSTAKOVICH / “The Age of Gold” Suite, op. 22a

I. Introduction
II. Adagio
III. Polka
IV. Danse

ショスタコーヴィチ ピアノ協奏曲 第1番 ハ短調 作品35 [約21分] P.17

SHOSTAKOVICH / Piano Concerto No. 1 in C minor, op. 35

I. Allegro moderato - II. Lento - III. Moderato - IV. Allegro con brio

ソロ・トランペット／辻本憲一（首席） Solo Trumpet KENICHI TSUJIMOTO (Principal)

[休憩 Intermission]

ショスタコーヴィチ 交響曲 第10番 ホ短調 作品93 [約57分] P.18

SHOSTAKOVICH / Symphony No. 10 in E minor, op. 93

I. Moderato
II. Allegro
III. Allegretto
IV. Andante - Allegro

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[助成] 文部科学省文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）

[協力] アフラック（アメリカンファミリー生命保険会社）

〈サントリーホール30周年記念参加公演〉

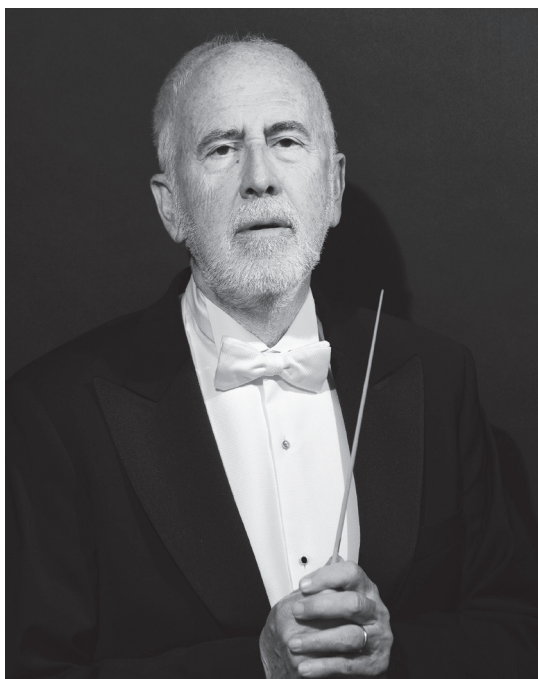
ヘスス・ロペス=コボス

Jesús López-Cobos

風格あるスペインの名匠
読響と初共演

スペインが誇る世界的名匠。長年にわたってオペラとコンサートの両方で活躍し、劇的かつ格調高い音楽作りで世界中にファンを持つ。今回は、母国が生んだファリャ、アルベニス、トゥリナなどの名品でスペインの魂を聴かせてくれる。

1940年生まれ。マドリッドで哲学を修めた後、ウィーンで名教師スワロフスキーの下で指揮を学んだ。68年にフランスのブザンソン国際指揮者コンクールで優勝して一躍注目を集め、輝かしいキャリアをスタートさせた。81年から90年までベルリン・ドイツ・オペラ音楽総監督、86年から2001年までアメリカのシンシナティ響音楽監督、03年から10年までマドリッド王立歌劇場音楽監督などを歴任し、その地位を不動のものとした。特にベルリン・ドイツ・オペラとのワーグナー〈ニーベルングの指環〉



©Georges Braunschweig-GM-Press

4部作の一挙上演は大きな話題を呼んだ。

また、ベルリン・フィル、ウィーン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、ロンドン響などの一流オーケストラ、ウィーン国立歌劇場、ミラノ・スカラ座、メトロポリタン歌劇場などに客演し、高い評価を得ている。録音もシンシナティ響とのファリャ〈三角帽子〉やブルックナーの交響曲集（テラーク）ほか多数が出ている。

読響とは今回が初共演となる。

◇ 9月16日 名曲シリーズ

ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー

(名誉指揮者)

Gennady Rozhdestvensky

ロシアを代表する巨匠
4年ぶりの登場

ロシアを代表する世界的巨匠が、名誉指揮者の称号を持つ読響の指揮台に4年ぶりに戻ってくる。曲目はチャイコフスキーの三大バレエ音楽とショスタコーヴィチ。いずれも自家薬籠中の名曲ばかりだが、生前に親交のあったショスタコーヴィチの交響曲第10番にはとりわけ注目したい。

1931年モスクワ生まれ。名門モスクワ音楽院で、父親であり、著名な指揮者でもあったアノーソフに師事し、弱冠20歳にしてチャイコフスキーの〈くるみ割り人形〉をボリショイ劇場で振ってデビュー。61年にモスクワ放送響、65年にボリショイ劇場の音楽監督となり、数々の海外公演でたちまち世界的に知られる存在になった。83年にソ連政府が設立したソヴィエト国立文化省響の音楽監督に就任。ショスタコーヴィチやグラズノフの交響曲全集を録音し、

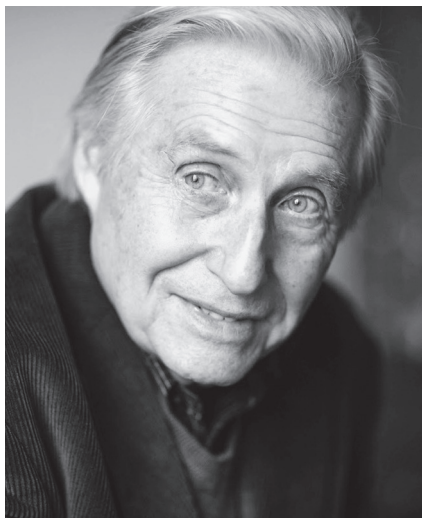


©Hikaru

世界的名声を得た。BBC響、ウィーン響、ロイヤル・ストックホルム・フィルの首席指揮者を務めるなど、西側のオーケストラにもたびたび客演。2000年から01年にはボリショイ劇場の芸術監督も務めた。

読響には1979年に初めて客演して以来、ショスタコーヴィチ、グラズノフ、プロコフィエフ、ストラヴィンスキーなどロシア音楽のスペシャリストとして知られ、根強いファンを持つ。90年に名誉指揮者に就任した。

◇ 9月24日 土曜マチネシリーズ
◇ 9月25日 日曜マチネシリーズ
◇ 9月26日 定期演奏会



©Jean-Baptiste Millot

ピアノ ホアキン・アチュカロ

Piano Joaquín Achúcarro

スペインの伝説のピアニストが26年ぶりに読響と共演する。曲はファリャの〈スペインの庭の夜〉。語り草となっている美しいレガートが聴きものだ。

1932年、スペインのビルバオ生まれ。ピアニストとして早くから頭角を現し、59年にブゾーニ国際ピアノコンクールに入賞後、ロンドン響と共演して大きな注目を浴びた。ベルリン・フィル、ニューヨーク・フィル、シカゴ響、フランス国立管など200を超えるオーケストラ、そして、アバド、メータ、小澤征爾、シャイー、ラトルらそうそうたる指揮者と共演を重ねている。

◇ 9月16日 名曲シリーズ



ピアノ ヴィクトリア・ポストニコワ

Piano Viktoria Postnikova

押しも押されもせぬロシアの大ベテランが今回、ショスタコーヴィチの難曲、ピアノ協奏曲第1番を弾く。衰えを知らぬ技巧とみずみずしい感性を遺憾なく発揮してくれるだろう。

モスクワ生まれ。モスクワ音楽院でフリエールに師事し、65年のショパン国際ピアノコンクール、66年のリーズ国際ピアノコンクールで入賞し、世界のひのき舞台にデビューした。69年に指揮者のゲンナジー・ロジェストヴェンスキーと結婚し、72年のモスクワ放送響の日本ツアーにそろって来日した。

読響には4年ぶりの登場となる。

◇ 9月26日 定期演奏会

9.16 [金]

柴田克彦 (しばた かつひこ)・音楽ライター

シャブリエ 狂詩曲〈スペイン〉

作曲：1883年／初演：1883年11月4日、パリ／演奏時間：約8分

フランス近代音楽の先駆者エマニュエル・シャブリエ（1841～94）は、父親の意に添って内務省の官吏となったが、勤務と並行して創作を続け、ダンディ、デュパルク等の作曲家や、詩人ヴェルレーヌ、画家マネらと交遊した。そして1879年、ワーグナーの〈トリスタンとイゾルデ〉を聴いて衝撃を受け、翌年に内務省を退職。39歳にして音楽に専念することとなった。

それから間もない時期に生まれたのが、代表作であるこの曲。1882年、彼はスペインに旅行して当地の音楽に魅了され、民謡等を熱心に採譜した。翌1883年、旅の成果に基づいて本作を完成。マラゲーニャやホタといった民俗舞曲のリズムを用いた沸き立つような音楽は、その後スペインの大家フ

ァリャに「いかなるスペイン人も書けないほど見事で正しい」と賞賛され、華麗な色彩感やラヴェルにも影響を与えた。ただ、全体に漂う洗練された雰囲気は、やはりフランスの作曲家ならでは。このセンスの良さが名作たるゆえんでもある。

曲は、3/8拍子で書かれていながら2拍子に聴こえる巧妙なリズムが大きな特徴。これがスペイン情趣をかきたて、さらにはハープ2台の使用も効果を発揮する。ピッツィカートで軽快に開始。リズムカルな主題を中心に盛り上がり、ファゴットによるおどけた主題など、複数の旋律が加わって華やかに進む。トロンボーンが活躍する中間部を経て前半部分が戻り、中間部の主題も絡んだにぎやかな終結部に至る。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット4、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（タンブリン、トライアングル、シンバル、大太鼓）、ハープ2、弦五部

ファリヤ 交響的印象〈スペインの庭の夜〉

作曲：1910年頃～15年／初演：1916年4月9日、マドリッド／演奏時間：約23分

スペイン民族主義音楽の大家マヌエル・デ・ファリヤ（1876～1946）は、1905年作の歌劇〈はかない人生〉で認められ、1907年からパリに留学。ドビュッシー、ラヴェル等から影響を受け、1914年に帰国後は、民族主義と印象主義を融合させた独自の作風を築いた。本作はその端緒となった1曲。フランス留学中の1910年前後に、パリ在住のスペイン人ピアニスト、リカルド・ヴィーニエスに捧げられるべく着想され、スペインに戻った後の1915年に完成された。ちなみに、翌年4月の初演を指揮したのは、アルベニスの〈イベリア〉の編曲者エンリケ・フェルナンデス・アルボスである。

曲は、管弦楽とピアノ独奏によって、南スペイン・アンダルシア地方の庭の夜の“雰囲気”が、官能的かつ色彩的に表現された、文字通りの「交響的印象」。ここでファリヤは、生地アンダルシアの民族音楽のリズムや音調を用いながらも、直接的な描写を避け、表題が喚起する情緒を印象主義的な手法で描いている。全体に変化の著しい音楽が展開され、かつてアラビアが統治したアンダルシア特有の東洋的なテイスト

が、生命感溢れる曲の中に、気だるさや神秘性を醸し出す。また、ドビュッシーやラヴェルにも例のないようなピアノ独奏の使用法がユニークなサウンドを実現。ピアノは明確なソロを奏でるが、協奏曲のように名人芸を披露するのではなく、オーケストラと共奏し、溶け合いながら夜の雰囲気を作り出す。

以下3曲で構成。第2、3曲は切れ目なく演奏される。

第1曲“ヘネラリーフェにて” タイトルは古都グラナダのアルハンブラ宮殿に隣接した宮殿の名。美しいその庭園の夜を描いた、いかにも南欧風の音楽。

第2曲“はるかな踊り” 場所は特定されていないが、遠くから聞こえる東洋風の舞曲の印象が描かれ、次第に活気を帯びていく。いったん静まった後のピアノの上昇音型が次の曲へつながる。

第3曲“コルドバの山の庭にて” コルドバは、グラナダ同様に中世のイスラム教徒モーロ人が建てた町。この曲にはそうした東方的な情緒がより色濃く漂う。激しく始まり、強いアクセントが特徴的な旋律を中心に高揚後、静かに終わる。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、トライアングル）、ハープ、チェレスタ、弦五部、ピアノ独奏

アルベニス（アルボス編） 〈イベリア〉から

作曲：原曲=1905～09年、管弦楽編曲=1910～27年／
初演：原曲=1906～09年、バリ他。管弦楽編曲=1910～27年、マドリッド／演奏時間：約28分

スペイン民族主義音楽の確立者にして名ピアニストでもあったイサーク・アルベニス（1860～1909）は、当初マドリッド、1890年からロンドンを本拠とし、組曲〈スペイン〉等のピアノ曲で名を上げた。そして、1893年以降はパリに定住。ダンディ、ショーソン、フォーレ等の大家から影響を受け、スペイン情趣溢れる作風に洗練味を加えていった。その到達点ともいえるのが、1905年から亡くなる1909年にかけて作曲された組曲〈イベリア〉。故国への郷愁がこめられたこの独創的なピアノ曲集は、近代スペイン音楽中、屈指の傑作として名高い。

今回演奏されるのは、全4巻12曲から成る同組曲のうち5曲を、アルベニスの友人でもあったスペインのヴァイオリニスト、指揮者、作曲家のエンリケ・フェルナンデス・アルボス（1863～1939）が、作曲者没後の1910年から1927年にかけて編曲した管弦楽版。民族音楽のリズムや哀切な情感をはじめ、原曲に内包された様々な要素を色彩的な管弦楽法で明らかにした名編曲である。なお、残る7曲も同国のカルロス・スリナッチに

よって編曲されており、本日の指揮者ロペス＝コボスは全曲を録音している。

アルボス版は曲順が変えられているが、今回は原曲の順に演奏される。

喚起（エボカシオン）：第1巻第1曲。国外生活が長いアルベニスは、まずスペインの魂を呼び寄せる。3拍子の郷愁漂う音楽。

港（エル・プエルト）：第1巻第2曲。南部のカディスに近いサンタ・マリア港の活気に満ちた様子。

セビリアの聖体祭：第1巻第3曲。古い祭の行列の描写。有名なスペイン民謡（童謡）〈ラ・タララ〉の旋律が用いられ、宗教歌サエタの一節で高揚する。

トリアーナ：第2巻第3曲。タイトルはセビリアのジプシー居住区。軽やかさと哀感が同居した、闘牛場の音楽パソ・ドブレの趣も漂う1曲。

エル・アルバイシン：第3巻第1曲。こちらはグラナダのジプシー居住区。情熱的かつ詩情豊かな音楽で、フラメンコ風の歌とリズムも聞かれる。ドビュッシーが「この曲に匹敵し得る楽曲は、世の中に僅かしかない」と賞賛したことでも知られる。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット3（コントラファゴット持替）、テナー・サクソフォン、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、タンブリン、トライアングル、銅鑼、チューブラーベル、グロッケンシュピール）、ハープ2、チェレスタ、ジュドゥ・タンブル、弦五部

トゥリーナ
交響詩〈幻想舞曲集〉 作品22

作曲：1919年／初演：1920年2月13日、マドリッド／演奏時間：約17分

ホアキン・トゥリーナ（1882～1949）は、近代スペインの作曲家、ピアニスト、教育者、評論家。彼もまた、マドリッド音楽院で学んだ後、1905年からパリに留学し、ダンディとモシュコフスキに師事。ドビュッシーやラヴェルのみならず、同時期に当地にいたアルベニスやファリャから影響を受けた。1914年ファリャと共に帰国後は、やはり民族主義と印象主義を融合させた作品を発表。1930年からはマドリッド音楽院の教授も務めた。作曲面では、〈セビリア交響曲〉をはじめとする管弦楽曲やピアノ曲のほか、同国の作曲家には珍しく室内楽曲で成果を挙げている。

本作は、1919年8月に書かれたピアノ独奏曲の、作曲者自身による管弦楽版。この年の後半に編曲され、1920年2月、原曲よりも先に初演された（ピアノ版は同年6月に初演）。曲は、活気ある民俗舞曲と幻想的な場面が相前後しながら運ばれる、タイトル通りの音楽。スペインの作家ホセ・マス（1885～1941）の小説『La orgia = 饗宴』にインスパイアされた作品でもあり、3曲それぞれの楽譜の冒頭にその一節

が記されている。

ちなみにこの曲、一般のクラシックファンにとって馴染み深いとはいえないが、日本の吹奏楽界ではかなり知られた存在である。

第1曲“熱狂”「比類なき絵の中の肖像が、まるで花の夢へ移ったように思われた」といった一節が引用されている（意訳。以下同）。「アラゴンのホタ」という跳躍を伴う踊りのリズムを使用。幻想的に始まり、テンポを速めて民俗的な旋律が奏され、激しい舞踏が展開された後、冒頭の楽想が戻る。

第2曲“夢想”「ギター弦は、苦い重圧のもとで、救いのない魂の悲歌を鳴らした」。バスク地方の5拍子の舞曲ソルツィーコを用いた、流動的かつ神秘的な音楽。5/8拍子と6/8拍子の部分が交替する。

第3曲“饗宴”「花の香りは、マンサニーリャ（白ワイン）の匂いで結合し、比類なきワインに満たされたグラスの底から、喜びの声を上げた」。「ファルーカ」というフラメンコの一様を用いた音楽。ダイナミックな場面と叙情的な場面が交替し、華麗に終結する。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（グロッケンシュピール、鐘、トライアングル、タンブリン、シンバル、サスペンデッド・シンバル、大太鼓）、ハーブ、弦五部

9.24 [土]

9.25 [日]

道下京子（みちした きょうこ）・音楽評論家

チャイコフスキー
バレエ音楽〈白鳥の湖〉から

作曲：1875年8月～76年4月22日／初演：1877年3月4日、モスクワ／演奏時間：約23分

ピョートル・チャイコフスキー（1840～93）は、ウラル地方の出身。若い頃の彼はロシアの国民音楽に惹かれながらも、西洋の音楽表現へと強く傾倒してゆく。民謡の旋律を取り入れるなどロシアの民俗性を表現しつつ、西洋音楽の洗練された世界、とりわけロココ的な雅さとモーツァルトの音楽のような透明性を追求し、それらが作品のなかで見事に融合している。

チャイコフスキーは、母親がフランスの貴族の系譜を引くことから、フランスのロココ的なスタイルへの強い思いをもっていた。それがよく表れているのが、彼のバレエ音楽である。

本日、演奏されるのはチャイコフスキーの三大バレエ、〈白鳥の湖〉〈眠りの森の美女〉〈くるみ割り人形〉の音楽。

〈白鳥の湖〉は、チャイコフスキーの最初に世に出たバレエ音楽。初演の評判は、芳しくなかった。このバレエの真価が認められたのは、チャイコフスキーの死後、弟のモデストが台本、マリウス・プティパとレフ・イワノフが振

り付けをそれぞれ改訂してからである。

このバレエは全4幕。オデットは、悪魔ロートバルトに白鳥の姿へと変えられ、夜だけ人間の姿に戻ることが許された。城では王子ジークフリートの成人の祝宴が開かれ、翌日の舞踏会で花嫁を選ぶようにと、王子は王妃から告げられる。その夜、オデットは湖へやってきた王子と出会い、城で再会する約束を交わした。城を訪れたオデットは、王子が悪魔の娘オディールと愛を誓うのを聞き、湖へと戻る。慌てて湖へ向かった王子は、彼女に許しを得るが、そこへ悪魔が現れて王子と対決。王子は戦いに勝つも、もはや彼女は人間の姿に戻れない。失意のオデットは湖に身を投じ、王子も彼女を追う。なお、この作品のエンディングは、さまざまな版が編まれている。“序奏” 悲しみを込めた主題を、オーボエが奏でる。

“ワルツ” 第1幕、村の娘たちが踊るワルツ。

“4羽の白鳥の踊り” 第2幕の、〈白

チャイコフスキー バレエ音楽〈くるみ割り人形〉から 第2幕

作曲：1891年2月～92年4月4日／初演：1892年12月18日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約41分

〈くるみ割り人形〉は全2幕。E. T. A. ホフマンの童話『くるみ割り人形とねずみの王様』を、アレクサンドル・デュマ（父）がフランス語に翻訳。それをもとに、プティパが台本を手掛けた。このバレエもさまざまな版が編まれており、主人公の名前も、クララやマリー、マーシャと異なっている。

クリスマス・イヴの夜にクララの家で開かれたパーティで、彼女はくるみ割り人形をもらう。夜、ひとりで広間へ行ったクララは、眠りに落ちてゆく。時計が12時をさすと、クララは小さくなり、そばではねずみと人形の兵隊が戦いを始めた。クララがスリッパを投げ、そのすきに兵隊がねずみをやっつけた後、人形は王子へと変身。王子は、雪の世界を通して、クララをお菓子の国に導いてゆく。

本日演奏されるのは、このあとのシーン（第2幕）。クララはお菓子の国に招かれ、彼女をもてなす宴が始まると、お菓子の精が次々と登場して踊りを披露。やがてクララは目を覚ます。
情景 ハープの流麗な調べに導かれ、物語の始まりを告げる。
情景 音色の多彩な変化とともに、音楽は徐々に盛り上がってゆく。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（グロッケンシュビール、タンブリン、カスタネット、シンバル、太太鼓、サスペンデッド・シンバル）、ハープ2、チェレスタ、弦五部

鳥たちの踊り〉（全7曲）の第4曲。4羽の白鳥が交差した手をつないで踊る。
“ハンガリーの踊り” 第3幕。音楽はチャールダーシュのスタイルに則^{のつと}っており、愁いを帯びたヴァイオリンによる旋律が印象的。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ホルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、太太鼓、シンバル、タンブリン、カスタネット、小太鼓、銅鑼）、ハープ、弦五部

チャイコフスキー バレエ音楽〈眠りの森の美女〉から

作曲：1888年12月～89年9月1日／初演：1890年1月15日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約16分

〈眠りの森の美女〉は、帝室劇場の監督を務めていたフセヴォロシスキーの委嘱^{いしよく}による。フセヴォロシスキーは、ルイ14世時代のフランスを好んでいたとされ、バレエの題材として、同時代のシャルル・ペローのおとぎ話『眠れる森の美女』をとり上げた。しかし、実際にはペローのおとぎ話にとどまらず、他の題材もストーリーに取り入れている。台本はフセヴォロシスキーが手掛け、マリウス・プティパが振り付けを担当した。

以下、簡単なあらすじである。オーロラ姫の誕生^{うたげ}の宴に、リラの精をはじめ様々な客が招かれていた。そこに、悪の精カラボスが乗り込み、「編み針が指に刺さって姫は死ぬ」と予告する。月日は流れ、美しく成長したオーロラ姫の誕生^{ふん}日の宴で、カラボス扮する老婆は毒

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ホルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（小太鼓、グロッケンシュビール、シンバル、太太鼓）、ハープ、弦五部

“スペインの踊り” 第3幕。ボレロのリズムとカスタネットの響きが相まって、情熱的な音楽と踊りを繰り広げる。
“フィナーレ” 第4幕。ロ短調で示されていた白鳥のテーマは、ロ長調へと転じ、力強く華やかに終結する。

のついた針の入った花束を彼女に渡す。オーロラ姫は針に触れて倒れるものの、リラの精の魔法によって死を免れ、城で永い眠りにつく。100年後、オーロラ姫はデジレ王子に見つけ出され、王子のキスで目を覚まし、二人は結婚する。

バレエは全3幕、そのなかから本日は3曲が演奏される。

“ワルツ” 第1幕。オーロラ姫の誕生日の宴に招かれた村の若者たちが踊る。序奏ののち、典雅なワルツのステップにのり、弦楽器が息の長い旋律線をゆったりと歌い上げてゆく。

“パノラマ” 第2幕。王子がオーロラ姫が眠りにについているいばらの城へ向かう。
“アダージョ” 第1幕。誕生日の宴で、4人の王子とともにオーロラ姫が踊る。叙情豊かでシンフォニックな楽想。

柴辻純子 (しばつじ じゅんこ)・音楽評論家

ショスタコーヴィチ
バレエ組曲〈黄金時代〉 作品22a

作曲：1929～30年（バレエ）、1930年（組曲）／初演：1930年3月19日（組曲）、レニングラード／演奏時間：約16分

ドミトリー・ショスタコーヴィチ（1906～75）は、多作で多面的な作曲家である。それぞれ15曲の交響曲と弦楽四重奏曲に代表される器楽作品、オペラやバレエの舞台作品、劇音楽や映画音楽も多数手がけた。バレエ音楽は、〈黄金時代〉〈ボルト〉〈明るい小川〉の青年時代の3作品だけで、いずれも社会主義的題材による筋書きをもったバレエのために作られた。

1927年にモスクワのポリショイ劇場が革命的な題材によるバレエ（グリエールの〈赤い芥子〉）を成功させたことを受けて、レニングラード国立劇場でも同様の作品を作ろうと、1929年にバレエ台本のコンクールが行われた。映画監督のイヴァノフスキの台本が入賞し、ショスタコーヴィチが作曲に抜擢された。直前のオペラ〈鼻〉（1927～28）で栄光と挫折を味わったが、才気煥発で、斬新な発想の音楽を書く新

進の作曲家に白羽の矢が立ったのだ。

物語は、ある資本主義国で行われる産業博覧会「黄金時代」を記念して、親善試合に招待されたソ連のサッカー・チームが、資本家やファシストの陰謀に巻き込まれながらも、西側の労働者の協力を得て勝利するというもの。全3幕のバレエは、1930年10月27日に初演後、不評で打ち切られたが、その前に作られた4曲から成る組曲は、管弦楽の人気のレパートリーとなった。

第1曲 序曲 管楽器の軽やかな旋律で始まり、楽想や楽器の組み合わせを次々と変化させる。**第2曲** アダージョ サクソフォンが静かに歌い、ヴァイオリン独奏がロマンティックな旋律で受け継ぐ。**第3曲** ポルカ 作曲者自身のピアノ編曲など、様々な編曲で知られる。シロフォンの乾いた音色と、おどけた旋律が印象的。**第4曲** 舞踏 熱狂的な踊りの音楽。

楽器編成／フルート、ピッコロ、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット、コントラファゴット、ソプラノサクソフォン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、バリトン、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、小太鼓、銅鑼、トライアングル、タンブリン、ウッドブロック、シロフォン）、ハーモニウム、弦五部

ショスタコーヴィチ
ピアノ協奏曲 第1番 ハ短調 作品35

作曲：1933年／初演：1933年10月15日、レニングラード／演奏時間：約21分

バレエ〈黄金時代〉も、続く〈ボルト〉（1930～31）も、成功を収めることはできなかった。それでも舞台作品や映画音楽への興味は尽きず、次にショスタコーヴィチが完成させたのは、後にソ連共産党中央委員会機関紙『プラウダ』において「音楽の代わりの荒唐無稽」と批判される、オペラ〈ムツェンスク郡のマクベス夫人〉（1930～32）だった。しかし、この作品の空前の成功で作曲家として社会的地位が確立されると、以前のようなピアニストの活動も考えるようになった。

ショスタコーヴィチは、ピアニストとしても非凡な才能の持ち主で、国家の威信をかけて出場した、1927年の第1回ショパン・コンクールに入賞したことは有名だ。そこで、自らの演奏のためにショパンの同名曲をモデルにした〈24の前奏曲〉（1932～33）とピアノ協奏曲第1番が作曲された。

正式には〈ピアノとトランペットと弦楽オーケストラのための協奏曲〉。引用やパロディも含まれる、ユーモアとアイロニーにあふれた作品で、作曲者自身のピアノ独奏で初演され、大き

な成功を収めた。全体は、4楽章構成だが、切れ目なく演奏される。

第1楽章 アレグレット、ハ短調 独奏ピアノと弱音器付きのトランペットの印象的な導入に続いて、ピアノが思わせぶりな第1主題を示す。力強い第2主題に続いてトランペットが現れ、ピアノは終始目まぐるしく動き回る。

第2楽章 レント、ホ短調 暗い響きの弦楽合奏からピアノがトリルで静かに現れ、表情豊かな旋律を歌う。次第に激しさと力強さを増し、最低音域で連打される。トランペットの美しい歌をはさみ、ピアノが再現される。

第3楽章 モデラート、変イ長調 30小節に満たない間奏曲風の音楽。独奏ピアノの静かなカデンツァで始まり、力強い弦楽合奏との対比をみせる。

第4楽章 アレグロ・コン・ブリオ、ハ短調～ハ長調 作曲家得意のギャロップ風のリズムにのって、歯切れのよいロンド主題が、自作の引用やジャズ風の楽想をはさみながら現れる。トランペットの軽やかで技巧的なパッセージや民謡風の旋律、ピアノの最後のカデンツァも鮮やかである。

楽器編成／弦五部、独奏トランペット、独奏ピアノ

ショスタコーヴィチ 交響曲 第10番 ホ短調 作品93

作曲：1953年／初演：1953年12月17日、レニングラード／演奏時間：約57分

「荒唐無稽」の一言でオペラ〈ムツェンスク郡のマクベス夫人〉を闇に葬り去った独裁的指導者スターリン（1879～1953）の死後、ショスタコーヴィチが発表した最初の大作となった交響曲第10番は、第9番（1945年）以来、8年ぶりに書かれた交響曲である。

第9番は、第2次世界大戦後のイデオロギー統制を目的とした1948年の「ジダーノフ批判」の標的となった。ショスタコーヴィチは形式主義的な作曲家の筆頭としてクレムリンに呼ばれ、文化統制を担当していたジダーノフから直接指導を受けた。彼の作品は全作品が演奏禁止となり、モスクワ音楽院とレニングラード音楽院の両教授職も突然解任された。そのため国策的な映画に音楽をつけ、オラトリオで「社会主義リアリズム」への復帰を明らかにすることで、名誉回復を図らなければならなかった。

ショスタコーヴィチの人生は、常に政治や国家に^{ほんろう}翻弄されてきた。交響曲第10番は、1953年夏から秋にかけて作曲が進められ（一部はその前から着手され、発表の機会を^{うかが}窺っていたとする証言もある）、同年末にムラヴィンスキー指揮のレニングラード・フィル

によって初演された。「雪どけ」の時代を高らかに宣言するかのような曲を狙いすまして発表したと解釈すること、闘争から勝利へとといったベートーヴェンが示した英雄的な交響曲の図式と重ねて考えることもできるだろう。この交響曲をめぐる論争は、初演直後から国内外で巻き起こった。

なかでも翌年3月の作曲家同盟で開催された公開討論会、いわゆる「第10論争」では、交響曲全体がペシミズムに貫かれていることがソ連社会に異質であるとか、最初の三つの楽章に比べて終楽章が小規模で弱いなど、保守派と改革派が様々な観点から議論した。ショスタコーヴィチは、反論はせず、自作の音楽的な欠点を述べて、「この作品のなかで、私は人間的な感情と情熱を描きたかった」と結んだ。紆余曲折を経たが、最終的に傑作と認められ、作曲家の地位も安定が保たれた。

そして、1990年代に入ってから、ある女性にショスタコーヴィチが宛てた30通以上の書簡でこの交響曲が詳細に分析されていることが判明した。その女性、エリミーラ・ナディーロヴァとは手紙を通じてのみの関係だった

が、1953～56年に集中する手紙には彼女への憧れや会えない切なさ^{つづ}が綴られていて、作曲家の語る「情熱」には、きわめて個人的な想いも込められていたようだ。

第1楽章 モデラート、ホ短調 チェロとコントラバスの薄暗い序奏がゆっくりと始まる。冒頭の順次進行の動機は、他の楽章でも現れる重要な素材である。やがてクラリネットにロシア民謡風の寂しげな第1主題が現れ、次第にオーケストラ全体に広がる。続いて弦楽器のピッツィカートによってフルートが低音域で舞曲風の第2主題を示す。長調と短調の間を揺れ動くような旋律で、不安定な雰囲気を作り出す。これらの主題を組み合わせた展開部を経て、再現部では意表を突いて、第2主題がクラリネットに現れる。コーダで冒頭のうごめく音楽が戻り、ピッコロの対話で静かに締めくくる。

第2楽章 アレグロ、変ロ短調 激しいスケルツォ楽章。荒れ狂う嵐のような主部の主題は、ムソルグスキー〈ボリス・ゴドゥノフ〉の序奏との類似が指摘された。中間部は、猛烈な勢いの弦楽合奏に管楽器が力強さとさらなる勢いを与え、再現部は力強く突進する。

第3楽章 アレグレット、ハ短調 第

1楽章序奏の冒頭動機が現れ、弦楽合奏で静かに進められる。やがて3拍子のリズムにのって木管楽器が、ショスタコーヴィチの名前の音名象徴（DS[ES]CH）によるレ・ミ[♭]・ド・シを含む主題を繰り返す。中間部の始まりを示すホルンの動機は、作曲当時想いを寄せていたエリミーラ（EL'MIRA）の名前をミ・ラ・ミ・レ・ラと音名に読み替えたもので、これがショスタコーヴィチの音名象徴とともに何度も現れる。エリミーラの動機は、作曲者自身の分析によるとマーラー〈大地の歌〉第1楽章冒頭の引用という。劇的な盛り上がりを経て、ピッコロとフルートの静かな反復で終わる。

第4楽章 アンダンテ、ロ短調～アレグロ、ホ長調 重苦しい序奏は、オーボエ、フルート、ファゴットなど木管楽器が、悲しみに満ちた歌をつないでいく。そこから一転して、軽快で明るい主部では、ヴァイオリンの跳ね上がり旋回する陽気な主題が、エピソードをはさみながら繰り返される。展開部の最後で第2楽章の主題が現れるが、ショスタコーヴィチの音名象徴がそれを払いのける。ファゴットのおどけた旋律が再現部を導き、コーダでは再びこの音名象徴が、勝利を確信したかのように何度も繰り返される。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（エスクラリネット持替）、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（小太鼓、銅鑼、トライアングル、タンブリン、シロフォン、シンバル、大太鼓）、弦五部